四谷の
千枚田だより
第140号

横浜ゴム新入・幹部研修

四月三日、横浜ゴム新城工場新規採用社員十二名と幹部社員、総勢二十八名の研修が四谷の千枚田で行われた。この研修は今年で九回目になる。顧みれば、桜満開で吹雪に沖縄県出身の新入社員はビックリ。雨降りが二回など、天候も人生も快晴ばかりではない。こうした経験も研修の一環だと諭す。

社員一行は鳳来総合支所地域整備課安形課長の歓迎の挨拶に始まり、標高差二百メートルに広がる千枚田の保全継承の厳しさや千枚田を中核にした「むらづくり」等々を交えた（舜）の説明に熱心に聞き入った。特に横浜ゴム新城工場は環境を重視した会社であり、千枚田においても過去三年間生物多様性調査と題して河川のモニタリング調査を行い、昨年には千枚田二か所にビオトープを造成、生物の再生を試みるなど、地域貢献に尽くしている。写真①

他に、山津波で十一人の尊い犠牲者がでたが、近隣の人々の協力により僅か五年ほどで復田した話や地滑りなどで一集落集団移転した話など盛り込んでふれあい広場に到達した。

例年は、ふれあい広場の環境整備（清掃活動）をお願いしていたが、この十二日に開かれる「奥三河パワートレイル」のコースになる市道の清掃活動をお願いした。写真②

雨天のため、会場を身平橋集会場に移し、駆けつけて頂いた穂積新城市長から社会人の第一歩を踏み出す新人研修を風光明美な千枚田で行われたことに喜びを感じるとともに、この地を第二のふるさとと思い、頑張って下さい。と激励の言葉を贈られた。写真③　小林工場長は研修をお引受けしていただいた保存会や行政に対し、お礼の言葉と、新入社員には一日も早く仕事に慣れ、立派な社員になるよう、激を飛ばした。新城設楽農水事務所建設課河合課長補佐から「ふるさと水と土ふれあい事業」において千枚田の農道やふれあい広場の整備について報告があった。

昼食は保存会のメンバーが支度したシシ汁と味ご飯を「お代わり自由」で振る舞った。写真④

交流会は新入社員から出身地、将来像などの自己紹介があった。印象深かったのは「親に帰って来るなと言われた。新城に骨を埋める覚悟だ」と、気骨ある九州男児の発言に思わず拍手。写真⑤

交流会も和やかに終了、雨合羽を再度着用、千枚田入口付近の県道の清掃活動を率先して実施して頂いた。研修終了にあたり、何かとお世話になっている藤沢さんから地元保存会の協力に感謝の言葉と一大イベントであるパワートレイルコース（沿道）の清掃を環境活動の一環として大会日までに是非、実施させて頂きたい。と有り難いお言葉があった。保存会高橋副会長から千枚田におけるボランティア活動のお礼と激励の言葉でメを行い、バスで帰路につく若者に「頑張りんよ～」と全員で手を振って見送った。

①

②

③

④

⑤

美の里づくり受賞

（一財）農村開発企画委員会主催、農林水産省後援～次世代につなぎます　美しい農村景観～の募集に【先祖の遺産　四谷の千枚田を地域の宝としたむらづくり】と題して応募した結果「美の里づくり審査会特別賞」を受賞、表彰式には財源不足で恥ずかしながら欠席してしまいました。（既報）

郵送された賞状は横浜ゴム社員研修交流会において、保存会、行政の皆さんの前で穂積市長さんに受賞報告をさせていただいた。また、翌日の連谷お花見会の席上でも地域の皆さんに受賞披露をさせていただいた。

連谷地区お花見会

四月四日、連谷ふれあい交流館に於いて、恒例のお花見会（参加者四十名）が盛大に開催された。

卒業証書授与式

三月二十日

本年度の卒業生は二人で、真新しいセーラー服を着て岡山校長先生から立派な態度で卒業証書を授与しました。送る二人も素晴らしく、また、地域の住民、約五十名も門出を温かく見送りました。

入学式

四月六日、平成二十七年度入学式を挙行しました。

本校にとって最後の入学式であり、最後の新入生一名を迎えました。

一年生、三年生、六年生が各一名ずつ、全校児童三名となりました。

奥三河パワートレイル

四月十二日、スタートの茶臼山高原からゴールの湯谷温泉を目指す六十三㎞、累積標高四千㍍、制限時間十二時間の本格的ミドルディスタンスのトレイルランニング大会が開かれた。

参加選手七百五十名は茶臼山を早朝七時スタート、四十五キロ地点の千枚田には一位の選手が十一時三十分には到着。補給食もそこそこに次のエイドステーション棚山へと走り去って行った。十位くらいからの選手は拍手で迎える地元住民にもガッツポーズで答え「シシ汁、棚田米（ミネアサヒ）」に美味しいと感謝の笑顔で答えてくれた。

千枚田エイドステーションは「シシ汁と美味しいおにぎり」、また棚田の風景が素晴らしいとお互いにフェースブックなどで知り、何としても千枚田に辿りつくことを目標に約七百名が到着した。おかげでスタッフも含め、八百食のおにぎりもシシ汁を最後の数人には行き渡らなくなってしまった。

今回のイベント対応は保存会が母体となり連谷お助け隊、棚田っ娘、地区ボランティアの皆さんの協力のもとになんとか無事に達成されたことを感謝するものの、支度を含め二日間の手間を取らしてしまった連谷お助け隊、棚田っ娘、保存会の皆さんのご苦労を労う場を作る事が出来ず、大変申し訳なく思っております。

発　行　平成二十七年四月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二